

合同句集

待兼山

浪高俳句会



待兼山

浪高俳句会合同句集

待兼山

序

旧制浪高同窓会会長 河野富久雄（俳号 ふうくを）

浪高俳句会は、昭和五十四年四月 故山田不染（五回文甲）、林直入（十七回理乙）両氏を選者とし、その指導を受ける浪高俳句教室として始まり、その後、選者に吉年虹一（十七回文甲）氏を迎えて句会、吟行を重ね、浪高七十年記念式典には、旧制高等学校友誼校を招・句会を開く等 活発な俳句活動を続けて来た。句会の世話人は、故阪野池畔（五回理甲）氏に始まり、河野ふうくを（八回理甲）、井上浩一郎（二十二回文甲一）、河盛泰三（二十二回文乙）と受け継がれ、現在 阪本ゆたか（十六回文甲）、

鶴岡まこと（二十回理二）、田中嵐耕（二十二回文甲一）三氏により運営されている。

このたび浪高七十五周年祭を記念して創立以来初めて浪高俳句会句集が上梓されることになったが、この記念句集の編纂は現世話人三氏の尽力によるもので、平成十二年六月に三百十八回を迎える浪高俳句会の一頁を飾ることになった。

浪高俳句会は故山田不染氏をはじめホトトギス同人五人を擁し、今後も花鳥諷詠の途を浪高百年祭に向け歩み続けることであろう。浪高俳句会創立以来の物故先輩も多いが、この句集を諸先輩のみたまの前に捧げることとしたい。

平成十二年七月

序

河野富久雄

神山狼月

大塚せいき

山田不染

坂井義之

林直入

中尾好文

吉年虹二

岩田みのる

田村富美子

中島謙

金森骨子

阪野池畔

築部待丘

浜崎照三

藤岡朔土

田代淳一

山田一女

田代紀美子

鈴木康一

加藤潤子

乾珠村

重本彩陵

中村武雄

坪井すみを

藤原龍峰

鶴岡まこと

榎本走児

柏井春人

河野ふくを

井上浩一郎

前田草机

田中嵐耕

三宅洛艸

岩田政之助

君塚塘子

河盛泰三

阪本ゆたか

川崎香月

佐伯箕川

あとがき

◆世話人

斎藤義雄

阪本穰

藤田芳一

鶴岡誠

田中豊造

山田不染

届きたる踊浴衣に旅ごころ
大寒の一輪挿に花を見ず
垂れてゐる夏の穂草はうすみどり
大鳴門小鳴門石路の岬あり
ほそぼそと業平道や草紅葉
くれなゐるといふには暗し寒椿
露微塵かやつり草の細ければ
蛙田に灯台の灯のめぐり来る
いささかの人の気配に萩ゆるる
拱きてばかりもをれず草引かん
三人の老三様に寒がりて
炬燵より追出され来し男かな
初冬の雲に重さの見えて来し
菖蒲園うす紫の風が吹く
瀧つ瀬の音にまぎれず瑠璃の鳴く

枯れしもの枯れてゆくもの座右に活け
地平まで続く黄土や耕せる
一面の十薬踏まずとも匂ふ
実となりし萩の小庭を閉しあり
冬ざれしもの虫地獄鳥地獄
梅林に一挺の鉞忘れあり
太刀魚の箱に余りし尾の光
茸山へ馬頭観音おはす道
胡弓の音心を濡らし風の盆
我が庭の夜を猪にあけ渡す
民宿をゆるがす風や波の花
にはうめの盛りといふは婀娜めきし
赤子負ふ嫁のをりけり磯開
万緑に染まりし夜の熟睡かな
雪深し人喰谷の名の今に

母校古希

林 直入

蛍飛び交ひて古びし発電所
焼藪は小走りに買ひ戻るもの
すぐに又生えさうな草引いてをり
踊の灯とは明るくて暗きもの
曖昧でありしがうなの足の数
止りたる団栗独楽に、と目鼻
暁闇に火花す登山靴の鋏
莖立ってゐる葉牡丹とわかるまで
夕されば鹿啼く島の泊りかな
観覧車いま蝉時雨真下にす
大阪の音戻りつつ松過ぎぬ
文楽が好き照焼の鱧も好き
不便さも少し楽しみバンガロー
誰も見てをらぬ師走の月上る
夏炉端大先達を上座とす

空に水放り上げて滝落ちて来し
かたかごに万葉人となり屈む
やや小さし団地サイズは花莫塵も
省略のなき大夕立なりしかな
初旅といふもいつもの古鞆
年豆の数のこんがらかつてをり
母校古希亀鳴く池はそのままに
泡立草枯れていよいよ泡立ちぬ
途中から塩なくなりぬ草相撲
大根と小魚並べ干すも島
無理をせぬ寒菊の黄でありにけり
風船の蛸足の数省略す
黒土の下は赤土蒟蒻掘る
穴を出し蛇の痩せてもをらざりし
カラットで言ふには大き竜の玉

林隆夫 直人

大正十五年十月十二日生・旧制浪高十七回理乙・東大農芸化

浪高俳句会選者・山茶花同人・ホトトギス同人

日本伝統俳句協会評議員

どびろく

吉年虹二

時雨馴れしたる宇多人歛止めず
裸押掛声湯気となり初めし
鹿鳴けるあたりの闇の動きけり
鮎子を干し浜風を白くしぬ
梶の葉の一夜過ぎたる願ひ萎ふ
一村の寺に始まる冬構
夕づける風に勢ひし祭笛
小鳥来る温泉町の朝の静けさに
猪鍋に論談沸騰し来たる
片屋根を下ろせしばかり又吹雪く
墓肥えて運動不足かも知れず
沙羅落花流すことなく山雨去る
買ひ替への船よく走り磯開
更けてより古調にかへる踊唄
寺町は塀の町なり白芙蓉

瓢の笛女の吹けば女の音
厄払ひきて木屋町に待ち合はす
葛城の雨は斜めに牡丹寺
湧きつづく雲を夏野の果となす
口ばかり達者でありぬ負真綿
一本はどう食べやうか早松茸
川よりも低く町あり船施餓鬼
秋の蝉語尾を縮めて鳴き了る
黒潮の光のつまりし椿の実
千年の瘤に冬日の濃き櫂
踊子草踏まれ倒れしまま踊る
どびろくに落人の味ありにけり
初霜にとぢこめられし山の音
葱坊主涙をためて雨の中
み仏の大和弁なり練供養

吉年康次二虹二

大正十四年二月生・旧制浪高十七回文二・京大経

浪高俳句会選者・ホトトギス同人・日本伝統俳句協会幹事

未央主宰 句集「桜櫓」「河豚提灯」

田村富美子

衣更へて心のよりど得しごとく
赤き灯の廻る無月の観覧車
糊ききし夜具ひんやりと今朝の秋
ジーンズの早乙女の押す苗植機
忘れたきことの一途に夜を濯ぐ
灯を消して雛の顔白きかな
パリ祭の唄口ずさみ厨事
下闇に門古りし荘の門
庭下駄の音冬菊のあたりまで
花曇りほどき忘れの躰糸

田村富美子 富美子

旧制浪高一回理甲 田村誠彦の家族・平成十一年逝去

金森骨子

父の名の残れる遍路杖を突き

肩はらぬ暮し身につき鱧の皮

露けきは山の灯よりも港の灯

島人はやさしかりけり浜おもと

炉話の多少の尾ひれ許されよ

寒牡丹二上風音立てて

蚊遣焚くことも幹事の役なりし

踊の輪一巡したる顔に会ふ

裏山に兎毘掛け平家村

夜も黄砂降りし證の竿を拭く

夏霞より現れし島に着く

魚籟に来るまでは水音なき流れ

思ひ切り踊りて明日を考えず

波止撓むほど鯨釣の来てをりし

露の身の医師の一言頼りとし

きらめきて湖のすみずみまで小春

木洩日の水引草にあつまりし

探梅や海の展ける辺りまで

秋遍路作柄褒めて通りけり

古本屋下宿屋も減り漱石忌

金森寿夫ハ骨子 明治四十二年三月生・旧制浪高二回文乙・京大法
壺、山茶花同人、関西草樹会で句作 平成十一年五月二十一日逝去
遺族 金森幸子

築部待丘

雨の日は雨の色して金魚玉

ひぐらしや石おかれある志納帖

ほととぎす村に一軒なんでも屋

驚きし人に驚き穴まどひ

編棒のリズムに乗りて毛糸編む

竈の灯を消せば来るてふ雪女

戸一枚あけある茶店梅遅し

春愁もなくて若者の車駆る

残り福更に夜更けの残り福

雲の峰大阪港を小さくす

畔焼くや草ある限り火の走り

山容のままに新樹の甲山

灯ともりて綺羅なす像や雪祭

初雛や贈られしものみな飾り

剥製の猪玄関に冬の宿

表紙とり刻うごきそむ初暦

出ては入る熊野古道の木下闇

幼な名で呼ばれ踊の輪に入れり

大き継当て魎網干されあり

何か釣れ灯の走りたる夜釣かな

築部七太郎 待丘 明治四十五年七月生 旧制浪高三回文乙・京大法
鷹の巣、ひこばえ、秋、関西草樹会で句作
平成十年十月二十一日逝去 遺族 築部稔

花見酒

藤岡朔土

島通ひ船室に挿す寒椿

なまはげの面の下より若き顔

若き声会陽の闇をゆるがすも

貝少し小振りでありし磯開

哲学の道で商ふ花見酒

洋菓子に飽きたる口に椿餅

紅白の牡丹ふれ合ふ風の来て

置竿の魚信に逃ぐる水馬

けもの名それぞれ付けしバンガロー

風見鶏見下ろす庭に枇杷熟るる

蝮をる雑木林を相続し

貼紙にひらがなで書くわらびもち

山の客迎ふる駅の作り滝

引潮の忘れて行きし海月かな

夏布団さへも重しと嘆かるる

ウーロン茶にてもてなされバナナ園

谿音を消して寺苑の盆踊

潮騒を聞きて椿の実となりぬ

庭隅の花柵の香でありし

湯冷めにもこりず朝風呂欠かさず

湯冷めにもこりず朝風呂欠かさず

藤岡一雄 朔土 明治四十四年十月生 旧制浪高三回理甲・京大農芸化
関西草樹会にて作句、日本伝統俳句協会会員
ホトトギス、未央に投句

山田一女

冬紅葉一夜の風に散り尽し

新しき浴衣に年を忘れをり

流水の泣くと岬に人立ちて

病む夫に冬支度さへ心して

大阪の上り景気や戎籠

なつかしきこの道なれど春寒く

旅に出て治りてをりし夏の風邪

ひらひらと木の間木の間を梅雨の蝶

句碑なでて今日は白露の日と思ふ

白菜の甘き匂ひに厨事

回廊の長しつららを見ることも

二階より手の届くなる椿宿

湿原の橋渡りゆく山の蟻

凍蝶の日毎小さくなりゆけり

出稼ぎの夫帰りきて山笑ふ

不知火の海こはしともわびしとも

秋うちは離せぬままの看取かな

やや寒の心ひきしめ看取かな

どの部屋に入るも夜寒を覚えけり

六甲の木の香匂へるバルコニー

山田いち＝一女

旧制浪高五回文甲 故山田市郎の家族

鈴木康一

枕辺の飾りとなりし秋団扇
看取りつつ妻は日傘の刺繍かな
麻痺とれぬ手に折持ちて曼珠沙華
亡き妻の友の便りの身に入みし
法師蟬妻は尽してくれて死す
一杯の麦茶のうまし試歩終へて
春愁や友に会ひても別れても
秋の蚊のつきまとひけり麻痺の身に
風邪引かず健とも言へず過ぎしをり
懸命の試歩満身の汗止まず

乾 珠村

せんぶりの花咲く山のけもの道
驟雨来て今宵涼しき熟睡かな
露けしや苔むす岩を神となし
花の宿今宵は女客ばかり
火の踊り見つつハワイの夜涼し
忍者村大緑陰にかくれあり
白鳥の抱く卵の真青なる
潮まねき穴より遠く離れざる
人の声聞き分け浮ぶ金魚かな
クーラーの部屋に入れよと子犬啼く

神山狼月

装ひし山の向ふに隠れ耶蘇

山の手の一聖堂の夕桜

硫黄噴く山はだにして秋の草

背景に梅描かれて二の替

嫁ぐ娘と一つ鏡に初化粧

閉山の坑夫長屋の雪達磨

街道をはさみ海苔干し大根干す

春めくや妻に代りて小買物

書に倦みし眼にちらちらと秋の蝶

句座涼し浜の名のつく花二つ

そのかみの石切場道鳥雲に
瓜漬やいつとはなしに夫婦老い
田の神に燭奉り虫送り
商用の旅の寸暇や酉の市
小高きに西国札所海苔を干す
母子寮の小さな窓の夜なべの灯
妻植ゑし撫子咲きて妻の病み
順を待つ五右衛門風呂や遍路宿
かなかなの声を濡らして通り雨
かなかなや鞍馬の駅は寺造り

神山弘二狼月 大正四年三月生・旧制浪高五回文甲・京大経
壺、関西草樹会にて句作

平成五年四月一日逝去 遺族・西野武史

大塚せいき

星一つ又一つ出て蚊食鳥
賀茂の馬待ちある柵に蛇の目蝶
顔見世の地下につづらのうづ高く
幾度も茶をがぶ飲み田草取
新涼の朝の蝶は水色に
雲の中雲の動きて梅雨に入る
観覧車花の中へと沈みゆく
引き込まれさうで退く滝の前
見せ物の小屋閉ざされて残り福
故郷の乗換駅の盆の月

大塚世紀^{II}せいき 大正三年二月生・旧制浪高五回文甲・京大法
山茶花同人、ホトトギスに投句 平成七年一月十七日逝去
遺族・大塚登司

麦生の床

坂井義之

馬塚をま中に青田広がれる
雪二尺しづかに籠る僧をりし
露草をグラスに浮かべ朝の卓
踊果て裸電球揺れてをり
秋蚕飼ふ里早々と暮れにけり
先生と園児と同じ夏帽子
箱庭に川と流るる白砂かな
階に銀杏乾せる社殿かな
老いの身の雑踏避けて残り福
病窓に明るく開き君子蘭

磯かまど明るき声の飛び交ひて

白木蓮の高きを門の目標しに

三十年勤めしあとの朝寝かな

棲みふりし墓を愛しと思ひけり

いと軽し喜寿の祝の夏蒲団

脚早に見えずなりけり藁掘

逢坂の夜の暗さよ蝉丸忌

花莫塵の匂ひただよふ家具売場

郊外のバス停ごとの地藏盆

啄木鳥の乾ける木の間ふるはせて

中尾好文

軒下の沈丁匂ふ京の路地
かき舟のありし川面を覗きけり
さしのべし指に乗りけり子蠶螂
厨よりはづむ声あり水ぬるむ
食ひ初めの御膳の上の桜鯛
登り来て赤坂村にラムネ飲む
我が天地櫓炬燵の四畳半
百姓の演ずるお宮秋祭
盆の僧野球の話して帰る
冬立つや山の分校火入れ式

風薫る

岩田みのもる

春寒や眼並べて干鰯

つぎつぎと芽吹きはじめし雑木山

春昼や椅子にのこれる忘れ物

一片の落花にまとふ夕日かな

讚美歌の流るるダム湖イースター

北国の白樺光る五月来ぬ

夏来る窓辺の風に夢路へと

楠若葉梢にまとふ風絶えず

夏霧に人消えてゆく尾瀬の朝

はびこりし草に晩夏の疲れ見え

朝顔の朱の彼方へ想ひはせ

波うてる風に色あり稲の花

竹林も大地もたわむ野分かな

岩壁を盆景にして初紅葉

霜月やひそと湖北の青蜜柑

行かうかと言へば凍鶴動きけり

初時雨無声映画のごとき村

午後の日の小虫あそばせ石路の花

大櫓空に幹あり冬日和

うす暗き小督の塚の枯芙蓉

天蒼々地茫々

中島 謙

朝露の大草原に駒一騎

初糶は明石鯛より始まりぬ

赤い靴薄氷割りて駈けすぎぬ

ベランダの灰皿に氷浮びをり

松過ぎて晩酌常に戻りけり

リラの花客待つ馬車に白く降り

ドナウ航画帖は春の雨に濡れ

水温むナイルの流れ白帆航く

ラケットをほり上げガッツ雲の峰

フエアウエイより末枯の始まりぬ

四温いざテニスにゴルフ又テニス
挿す魃の矢形の先に竹生島
鷗載せ五月の海の大うねり
野火赤し任地へ戻る汽車の窓
旅立ちし燕の巢より藁たれて
烏賊舟の落日指して出航す
高千穂の流れを魚籜の絞りをり
夏座敷海からの風山へ抜け
九十九折る度に歓声谷紅葉
雨垂れの音無く沈み敷松葉

阪野池畔

泰山木雨に咲きをり華僑住む

金剛の緑を映し田水張る

耳すます水琴窟の音は冬

薄雪の朝の光に目覚めたり

甲山裏に廻りて余花に会ふ

猫の子を捨てに行く役決まらざる

鶯や今日は休みの登り窯

広前に卯浪寄せ来る浦の宮

遠蛙かすかに在りて荘暮るる

籠り堂荒れ果てしまま墓の鳴く

初曆四疊の書齋明るくす

尼寺に程良く似合ふ滝のあり

浴衣着て泊月門下老いたれど

磐座に一つ葉育つ裂目あり

滝の水渦巻き流れ殉難碑

堰落つる流れの響き夏料理

どの家も屋号で呼ばれ木守柿

中国の夕陽大きく麦の秋

明石港根釣日和の中にあ

買初のネクタイのやや若返り

冬構

浜崎照三

犬小屋も毛布を入れて冬構
波際に跣足の指間砂流る
蕪村忌や淀の流れもせはしげに
辺境に四温の日をば待ちし頃
関取に三寒四温など無かり
檀家毎出さる草餅持て余し
生身魂後姿はなんとなく
年毎に高くなりゆく桐の花
村社とは思へぬ大堰の船祭
正直に来し方残す蛞蝓

山河抄

田代淳一

二上の風に崩るる夕牡丹

時折は山霧下りる麓駅

白髪の兄弟となり墓洗ふ

法師蝉鳳凰堂の四方より

稲架襖高きにありし泊瀬かな

わが文の春料峭と古めかし

青葉木菟古城に鳴ける故郷かな

鐘三打僧現はれず涼しけれ

秋興にそむきてこもる恙かな

耕人に海の風ある岬かな

健やかな身の夢を見て明易し
羅陵王舞ひつつ過ぎし祭船
凧に逆白波の河口かな
松籟に建礼門の雪解かな
彩亭を巻きたる龍や春節祭
緑陰に笙鼓ととのひ楽起る
中將と読まれて露の無縁墓
短日や叱る迄なき子を叱り
居ついでには困る子猫と思ひつつ
街薄暑マリンドールの微風来て

春宵

田代紀美子

丹波路や青田にうつる赤き屋根

古都一円墨絵となりて梅雨に入る

梅雨滂沱児らひつそりと本を読み

夫病みて冷たき夏は終りけり

盆僧の後姿の稚くて

古典聞く午後の集ひの秋扇

ハミングのおのづと出でし厨春

旅立ちの朝梅雨入りの予報聞く

そぞろ寒お寺廻りて句碑に逢ひ

万葉のつらつら椿巨勢の里

野辺送り百日紅が目に染みて

小春日や一枚脱ぎて小買物

黒揚羽御座舟追ひて消えにけり

ふんわりと春の雪のせ花時計

大試験出でゆく孫の背に祈る

鈴なりの実梅の大樹百年家

秋深し旅に出る人帰る人

旅衣解けば草の実ポロと落ち

古稀通過喜寿の坂道二月尽

牡丹咲く極楽浄土当麻寺

石仏

加藤潤子

バス降りる園児げんげを握りしめ

遠足の子等と汽車待つ田舎駅

山の宿霧の中より通ひの娘

すぐ裏の名もなき山の紅葉す

級長をやはり上座に鍋料理

冷房に麻痺の腕を庇ひけり

たらえふに書きし字消えず秋灯

病名をまだ告げられず秋深し

大極殿跡地に立てば帰り花

草野球終りし河原虫時雨

石仏の胸によりそふ秋桜

北野坂ねむれる山につき当る

家隆の墓にも聞ゆ祭笛

小春日や同じ影おく石仏

雨予報祭浴衣を着そびれて

帰省子の賑やかなりし隣家かな

芋虫の憎めぬ顔と出合ひけり

老犬の食欲増せり秋日和

松落葉茶屋の屋根よりあふれ落つ

湯豆腐や白髪まじれる夫の眉

重本彩陵

街の灯のしきりに恋し春の宵
忘年会来ぬ教え子の気になりて
秋の風ポプラの梢きらめける
蔦紅葉杉の高さに伸び上り
椋鳥のどつと寄せたる大樹かな
逢ひたしと賀状に添へて書かれあり
芭蕉忌やわれも浪華に住みつきて
夫にまだ言へぬことありざくろの実
百合の花窓に触れゆく姫新線
春雨の止むとき誰も気づかずに

夜桜

中村武雄

初午や信太の森の植木市

凡々の日々を過ごして梅雨の入り

蟻の道そつとまたいで門を出づ

春の田を大きく抱き利根流る

囀りや一つ所に止まらず

親子して風揚げしたる日もありき

峯かすめ大鷹一つ弧を画く

夜桜は普段着でよし土佐稲荷

草の実に待ち伏せられし小径かな

数々の別れと出会ひ老の秋

石路咲きて浜街道の名残かな

大阪に捨てるものなし鱧の皮

盆踊河内音頭もロツク調

温泉あぶ窓に傾く夏の山

春時雨勝手気ままの旅に降る

辛抱と始末の母の負真綿

道をしへ勝手にゆけととび失せぬ

威厳あり校長室の君子蘭

夏書して無念無想の墨匂ふ

末枯れてなほ懸命に花咲かせ

初風

藤原龍峰

初風や豊漁祈願宮詣

神を信じ人を信じて去年今年

初鶏や連山めざめ明け初めぬ

倅せを分たん賀状書きにけり

箱書の年号嘉永御重詰

彩樓に貴妃の名残りや春の虹

ものの芽の色とりどりに出揃ひし

雷に裂かれし大樹芽吹きをり

水温む岸辺におはす地蔵尊

香港の赫き夕日の競渡かな

土用干むかし綴りし俘虜日記

賜はりし禅の一字の扇かな

ナイヤガラ瀧の一句のエアメール

万緑やウィーンの森の馬車の旅

萩叢のほつほつ紅をふくみるし

一列に雲水下山紅葉散る

はからずも戦友と遭ふ遍路宿

王城はいま旅の宿暖炉燃ゆ

堂を守る老僧ひとり夜寒の灯

忠魂碑守る一樹の冬桜

藤原龍治＝龍峰 大正五年十二月生・七回文乙・東大法

壺、山茶花、田鶴、ホトトギスに投句

かつらぎに所屬、かつらぎ同人

榎本走兎

薄明にまだ動かざる毛虫焼く

行く秋や島の老妓のおけさ節

黒潮の 見えて 一本冬桜

訪ね来し母校に花の句座ありて

無為といふことに慣れむと暑に堪ふる

花の昼

河野ふくを

女子寮の洩るるコーラス花の昼

一灯に辿りつきたる夜寒かな

病院の壁に張り付く余寒かな

ふるさとの大きな切り身初鱈

神農の虎降り合うて別れけり

ちやんちやんこ淋しきときは鉦を打つ

喪に籠る心に寒き彼岸かな

包丁の切れ味怖き寒さかな

一山の彩の動きて散る紅葉

妻恋ひの折りに募りて春の星

父の唄残るレコード蝉丸忌
踊の輪指の先より明け初むる
野の姿活けて山荘炉を開く
散る紅葉とは風に乗りやすきもの
拾ひ得し視力に日脚伸び初むる
朝市の春の土の香買ひにけり
ついて来る足音みんな花疲れ
炎天に焦げさうな影ついてくる
枝豆を剥く指先の老いにけり
胃袋を労ることも年忘れ

貝寄風

前田草机

初日の出傘寿の背筋伸し居て
救急車来て初夢の目覚めたる
寒の雨マラソン選手湯気となる
貝寄風は昔の浜の名残とも
花冷は散り際飾る為にあり
草餅を一折提げて団子坂
せがまれて杉の実鉄砲作り居し
炎天下故郷の路に迷ふとは
踊子草ラインダンスの揃はざる
菅笠の見せ度き顔の阿波踊

楠の葉の夏瘦にして木洩れる日
耳遠き妻の鈴虫飼うてゐて
亀の子の泳ぐに委せ眠る親
蝉時雨別れの声と思ひゐし
徒然に萩のトンネル往き交ひし
目の合ひしバツタに寄らば群れて翔ぶ
蒟蒻掘る昏るる速さに急かれ居し
溝蕎麦や踏みあと途絶え獣道
葛根湯吹き飛ばしたる大嚏
鳥帰る淀の流れに沿ふことを

草の戸

三宅洛艸

ほどほどの忙しさもあり老の春
世の役に立つが生甲斐去年今年
薪爆ぜる音も故郷の初湯かな
静かなる夜ぞどか雪の来る気配
野焼火の走るにまかす中州かな
菩提寺は昔のままに田螺和
クローバに手をさし伸べし車椅子
のどけしや妻と一日の庭いぢり
髭伸びて夏書の相となりにけり
日の匂少し残りし日除捲く

梳きながら長電話する洗ひ髪
言はれればそれなりの味新豆腐
しぶしぶと子亀放つ子放生会
鯊釣るや人工島にビル競ふ
通夜の客しばし途絶えて螻蛄鳴けり
迎へ船着いて未練の根釣終ふ
初咲きの椿を挿して炉を開く
内宮の巨杉に聞けり神渡
出稼ぎの留守宅ばかり山眠る
乾きたる松葉敷き足し客を待つ

君塚塘子

カーテンを洗ひひとしほ春めきぬ
八階の窓に来てゐる蝗かな
左大映し水割りのみにけり
梅雨かこち空梅雨かこち通学す
呆然の犬を残して蜥蜴消え
短夜や犬二度三度我おこす
今年また同じところに蟻の穴
冬の月ただ何となくかかりをり
ビロードの袋古びし懐炉かな
花びらを舞はせ雀の諍へる

松過

阪本ゆたか

松過ぎて素顔の京にもどりけり

一夜明けこの町雪の統べてをり

転勤のホームの別れ春寒し

朝戸くる音のかるやか春めきし

みとせたち地震跡のかく草萌えて

紅梅の開かんとして艶増せり

磴半ばわれも花人紀三井寺

飛鳥人通りし野路にすみれ咲く

すみれ濃しそこはかとなく情あり

リラ香る遠きその日の中にをり

何もかも明るき素顔五月来ぬ

万緑に溶ける心の緑なる

黒潮に枇杷の大きく熟れにけり

冷房のあるかなしかの軽さかな

高野守る大社たり法師蟬

放生の鳥の一瞬ためらへり

艶やかに色直しして蛇穴に

さりげなく秋草活けし居間なりし

顔見世のことから話す京の人

冬至風呂一年分をつかりけり

冬至風呂一年分をつかりけり

菊つくる

佐伯箕川

炎熱のアラモの砦カンナ燃ゆ
雷雲を背に摩天楼競ひ立つ
夕立雲あがりロッキー現はるる
金銀の芒日に照り輝けり
息白くモスコ―着を確認す
春雷の何事もなく止みにけり
灯をかざしつつ峰入りの列続く
奔流のひびきまされり蟬しぐれ
ハバロスク枝折る野分すさまじき
長江に転げ落ちさう甘藷掘る

花野来て吉祥天女をろがみぬ

朝霧の谷間に溢れ山に這ふ

豆まきて地震の鬼をやらひけり

虫食ひも自然の絵筆柿落葉

蜜蜂の組んずほぐれつ分封す

木地削りつつ裏山に芋つくる

病室に聞ゆる踊囃かな

我が棺を満たすに足らむ菊つくる

コロラドの大峡谷に野麦熟る

山眠り阿吽の仁王眠らざる

冬の雨

佐伯道子

赤松の幹照る山や法師蟬
糸蜻蛉あえかに飛ぶや返り花
焚火あとほのかに匂ふ大けやき
逆光に神の銀杏の散り止まず
一筋の葛に日の照る切り通し
冬ざれて篁幹を白く立つ
曲屋の屋根の穂草や冬の雨

旅もよし気ままな余生四季楽し

斎藤義雄

春祭出店は子供ばかりなる

春暑し馬糞ころがる石畳

洞窟に舞ふフラメンコ春埃

春愁やパリ名物の十二叉路

草取りや後に楽しみ設けたる

庭紫蘇の一役買ひし具の風味

菖蒲湯にアルキメデスの原理かな

サングラス外せば眩し大氷河

手に汗をバンジジャンプの命綱

シベリアや夕焼けて直ぐ日が昇り

敬虔の托鉢僧の權涼し

徒然にワイプロたたく夜長かな

秋暑し褪せし軒端のくくり猿

転勤や夕月だけが付いて来て

終盤の野球談議や温め酒

終りなきカジノの夜なベラスベガス

今日も待つポイントセチアのあの席で

トレッキング葛湯で憩ふ宇陀の里

淡路より橋が引き寄す水仙花

懐手解いて確かむパスポート

紫木蓮

藤田芳一

紫木蓮人の住みゐる気配なく

ゴンドラに民謡乗せて春の潮

算額を説く僧老いぬ智恵詣

葱坊主少子の世をば笑ひをり

柏餅古きのれんを守り来て

風五月ゆるがぬ岩のゆるぎ石

城ヶ島夕焼富士に風ぎにけり

野仏の供華みな黄なる残暑かな

ならまちの間口の狭し新豆腐

文月やハーブに触れし指匂ふ

デカンショに町をあげたり月見豆

高原の視界開けり蕎麦の花

村おこし目玉土産に薬掘り

初霜や崩れしままの築地塀

千歳飴鹿せんべいを惜しみけり

飽食の猫のあくびや漱石忌

年忘れ忘れぬ年となりにけり

幼きをはや初糶へ但馬牛

公魚の孕みて透けり淡き縞

涅槃西風寝釈迦の阿蘇のうすけむり

思ひ出

坪井すみを

落柿舎の柿剪定をしてをらず

蟻の道なれば闊達どこまでも

春惜しむ我ら嗟峨にて道迷ふ

この穴は何のしるしや落し文

草笛の乾びるたりし匂帳かな

石段の崩れし滝の行場あり

干草の匂へる堤長かりし

吾のより妻のが登山杖長し

水の音聞きつつ去りぬ苔清水

風化して只の石なる墓洗ふ

大空にもみづる櫟大樹かな

西行庵まで歩くべし秋日和

ゴルフ球糸を引く如秋の空

のけ反りてのけ反りて鳴く牡鹿かな

秋篠の森の黒さよ十三夜

氷室社に色濃き紅葉残りけり

志賀直哉邸の外にて落葉焚く

鞘当ての鴨とそつぽを向く鴨と

雪虫のとべるここらは廓跡

春日野のしづけさに尚除夜の鐘

四季折々

鶴岡まこと

文化の日3DKに香たいて

朝焼けや水音のなきいさざ網

爪先に目がある如く蜷掘る

百度石千度石あり花の磴

岩走るあれが山女と教へられ

落慶の寺に玉解く芭蕉かな

頑なにはじけぬままの椿の実

冬日和猫の欠伸を貫ひけり

木星の瞬いて見ゆ冬木立

スケートの過ぎし後から風が追ふ

一隅を照らすが如く寒椿

涸れるとも遠見の滝の美しく

雨上り笠深々と踊子草

母鳥の背を取合ふて軽鳧の子等

夕焼けて舞台の別れ暗転す

放生会鳩の向ひし神の森

掘るまでは蒟蒻畑捨ておかれ

松過ぎや常に戻りし店構へ

旧正や漢字ばかりの賀状来る

極楽の風とはみえず涅槃西風

侘

柏井春人

掛軸に一輪ゆかし寒の菊

無残やな散る山茶花を雨たたく

万両の実のあかあかと雨に映え

退院の吾を励まし木々芽吹く

友偲ぶ心に彼岸の鐘しむる

白酒にほのと頬染め孫娘

今日もまた阪神は負け亀鳴けり

里山に春蘭一株侘び守る

湧き水の流れに添へばすみれ草

雨上り四十万十川に鯉幟

山女焼く香り漂ふ峡の宿

雨抱き頭を垂るる四葩かな

客迎ふ露地に散り込み沙羅の花

亡き友と語らひつつの夏書かな

蝉しぐれ浴びつつ朝餉待つことも

夏菜莢や野山を駈けし日もありし

玉坂に若き日想ふ金木犀

杜鵑草神の賜ひし侘の花

秋雨の冷たき朝に猫逝けり

吾立てばモネの世界か冬木立

花の雲

井上浩一郎

花の雲ぬけ出して来るモノレール

短夜のさらに短き眠りかな

鳩来しと病む妻の指す冬の窓

尼様の仕方話や地藏盆

茄子の馬などのらぬ気の写真かな

曾根崎のバーで瓢の実遊びをり

下闇につづく母校の廊下かな

人の世を見つめて雛流れゆく

九年経て山獨活提げて現はれし

危ふげに岸離れけり西祭

初糶の声に男の顔となる

花冷やよろづかしこき京女

草の葉の色が飛び出す雨蛙

いとど跳ぶほどの酒場でありにけり

大熊手六法踏んで帰りけり

荃漬や京の下宿のことも旧り

上町やちんちん電車夕焼けに

よく見れば狸薄目をしてをりぬ

先師には髯は無かりし竜の玉

いささかも振返らずに鳥帰る

井上浩一郎 昭和三十二年八月生・旧制浪高二十二回文甲一・京大法
大阪倶楽部俳句部、関西草樹会にて作句
ホトトギス及び未央に投句

金木犀

田中嵐耕

盛りたせば松茸飯の煌けり

君眠る東山連峰梅雨冥し

山小屋に向日葵の朝迎へけり

シャンソンの夕べの後の夜長かな

秋日傘たためばグリーン眩しかり

天高しシナリオ胸に逝きたまふ

紀の国や日の岬日の山みかん黄に

縄とびの子と縄光る冬日和

ロレックス歩く手光る小春かな

顔見世や托鉢僧の大橋に

涸れ滝に千年の苔光りたる
犬をつれ犬につれられ春の風
春の雲ゆつたりゆつくり観覧車
花の茶屋揃ひし顔の和みけり
十字架の祈りの道や道をしへ
パーパット決めたる後や氷水
天高しともに歩まむ人も古希
母の忌に顔の揃ふや金木犀
年忘れ九十九年の縄のれん
卒寿古希友や浪速の花の宴

緑蔭

岩田政之助

待ち合はす駅の時計や日脚伸ぶ

端正に咲きて一輪冬薔薇

雲の影走りゆく野や梅探る

苜蓿榆の並木へつづきををり

何事もなくて一と日の麗かに

夕冷えの吉野の宿の桜漬

鏡やや曇る卵の花腐しかな

緑蔭にビラの少なき掲示板

夕立の突き刺さりゐる舗道かな

まだ一人仕事してをる夜食かな

古戦場なりしや陰し葛の花

山登る道はいろいろ秋の蝶

湯上りの指やはらかに蜜柑むく

大銀杏散る大日向ありにけり

冬耕の人みな女余呉の里

白菜の崩れてゆくや鍋煮立ち

影動き冬日は街を移りけり

マスクして電車の隅に本を読む

大枯木星座正しく傾ける

遠ざかるとき笹鳴と思ひけり

遠ざかるとき笹鳴と思ひけり

岩田政之助 政之助 昭和四年十月生・旧制浪高二十二回文甲二・京大文哲
未央に所属、関西草樹会にて作句。ホトトギス同人

一陽来復

河盛泰三

閑けさは凍てし木の実を踏む音に

春節の賀詞は朱書の舊漢字

人数多るてさざめきのなき梅見

春光に金泥にぶき経拜す

書に倦みし車窓に春の山暮れず

羽織るものなし花冷の駅に下り

一呼吸二呼吸になほ飛魚とぶ

語らひのオールゆつたり遠柳

初鰹うま美し水平線丸し

間違へて戻る薄暑の道遠し

梅雨冷の底に降りゆく露天風呂

渾身に香り女王花果てり

こぼるるを受けつ夏藤活けにけり

点る火の揺れて繋がり大文字

突堤の石組深し秋の潮

新藁の青き香の絢はれゆき

龍の爪てふ宝物やそぞろ寒

庭草を挿し手すさびの炉を開く

街ポインセチア朱に染まり来し

千の御手隙なき隙の煤払ふ

曙

川崎香月

初糴にかけぬ大鰯神のもの

曙の名に引かれ買ふ椿餅

もう十三未だ十三と詣りけり

知識より智恵の子たれと詣りける

山五月少年山羊を追ひ行けり

咲き初めて向日葵の丈定まれり

山気吸ひ日を吸ひ育つ青かりん

丹生神に給ふ茗荷の花なりて

鉄砲と言ふ水のあと見舞ひけり

黙想す小さき花野の石に坐し

稿成りてさしもの夜長白みそむ

沈黙は金と無視せり冷やかに

割烹着白し朝寒纏ひけり

教室に持ち込まれたるばつたかな

桐の実の降る夜は音にさとくなり

頂ける神のおながれ濁り酒

子にもあるマクドナルドの年忘れ

緋燕の風が染め上ぐ緋でありし

一茶忌や信濃の闇の深うして

見られぬ人と見てゐる狸かな

あとがき

本句集は現会員二十八名の句（うち二十五名は自選）に元会員一名の句と故人十三名の句とを合わせた合同句集である。昭和五十四年四月に浪高俳句教室を開設してから第三百十七回俳句会（平成十二年五月十五日）までの二十一年間の会員の殆んどの方、四十二名が参加された編輯はつぎの要領で行った。

（1）浪高七十五年祭を記念しての句集であるので、四月六日の記念式典前後には発行すべく編輯を開始したのであるが、二十一年間の句会報の中から特選句を抽出するという仕事は予想外の手間がかかり、相当の努力と日数を要することとなった。そのため発行が遅延の止むなきに至ったことは申し訳なく思っている。

尚、故人についてはご遺族に連絡がつき、しかも本句集に

故人の句を掲載することについてのご了解を下さった十三名の方に限定させて頂いた。

（2）現会員中の山田一女氏、坂井義之氏、浜崎昭三氏は病氣療養中のため、これら三名の句と元会員田代紀美子氏の句および故人十三名の方の句は林直入氏に選をお願いし、掲載させて頂いた。

（3）本句集編輯にあたり種々ご指導を賜った林直入、吉年虹二両選者、序文を賜った本会会員であり、同窓会会長の河野ふくを氏、表紙の旧浪高校舎を素描して下さった中島謙氏その他、幅広いご協力を賜わった会員各位に厚く感謝申し上げます次第である。

平成十二年七月

世話人 阪本 穰（俳号 ゆたか）

鶴岡 誠（マ まこと）

田中豊造（マ 嵐 耕）

合同句集 待兼山

発行日 平成十二年七月

発行人 浪高俳句会

〒六六六一〇〇〇六

川西市萩原台西二丁目七〇

阪本ゆたか方

Tel 〇七二七―五八―六二七八

制作

株式会社 天満書房

〒五三〇―〇〇四三

大阪市北区天満二―六―三―二〇七

Tel 〇六―六三五八―九〇七三

頒価 二、〇〇〇円